International Christian University
教育研究 Educational Studies 42 / 2000
pp. 309-314

書 評 Book Reviews

『アジアをつなぐ英語—英語の新しい国際的役割』

本名信行　1999　アルク

"English that Connects Asia: The new international role of the English language" Nobuyuki Honna

宇田川洋子　国際基督教大学教育研究所
Yoko Udagawa　ICU Institute for Educational Research and Service

日本人の英語力の低さが問題視され、学校での英語教育への批判が高まってから久しい。日本人の TOEFL の平均点の低さがニュースで流されるたび、受験重視の英語教育を改善すべきであるという議論が飛び交う。しかし実際には何をしたらよいのかについては、今一つ論点がまとまらず、不満の解消には至っていない。文部省も、早期英語教育への取り組みなど改善を試みてはいるが、早急な効果は期待できない。こうした現状の中、英語教育の問題に頭を悩ます者の目を覚まさせてくれる一冊が、本書であると言えるだろう。

英語は国際的な言語である。このことは万人が承知していることだ。しかし、同時に日本人はどうしても英語という言語とアメリカやイギリスとを引き離して考えることができないのも事実だ。「英米人のように英語を話すことができない」ことを悲観的に受けとめ、「英語ができない」と嘆いている。本書ではこの歴史的に根強い考え方に対し、疑問を投げ掛けてくれる。

本書の第 1 章では、英語の話し手はネイティブ・スピーカーよりもノンネイティブ・スピーカーの方が多く、話し手の母国語をもとに多様化して

いること、そして「世界諸英語 (World Englishes)」という考え方がノンネイティブのみならず、ネイティブ・スピーカーの間でも盛んであることを紹介している。特にアジアにおける英語への関心の強さは、英語がもはや外国語ではなく、コミュニケーションのツールとして役立っていることを示している。同国民であっても母国語の異なるアジアの国々では、英語が日常生活での意志疎通に不可欠となっている。第 2 章では、こうしたアジア各国の英語の特徴を音韻・語彙・文法・語法等、様々な観点から記述している。我々はここで英米の英語との差異に驚き、日本人の英語ともどこか共通するものを見ることができる。第 3 章では、第 1 章と第 2 章で述べたことを踏まえ、日本人と英語との関わりについて述べている。日本人が英米英語を信仰し、その信仰を英語教育にも取り入れてしまっていること、そしてその改善のためにはいかなる意識を持てばよいのかを教えてくれている。最後に第 4 章で、日本人は英語といえばアメリカ人の言葉と捉えてきたが、このアメリカ英語と日本人の関わりについて考えている。

「英語はアジアの言語である」(p. 26) と、本書第 1 章で著者は断言する。まさにこのことを日本人は忘れていると言えよう。事実、本書によればアジアの英語人口は 3 億 5 千万人と言われ、英米の人口合計を大幅に上回る。もちろんこのアジアの人々の母国語は英語ではない。今後、政治・経済・観光・留学などを通し、英米人とよりもアジアの人々と英語を使って意志疎通をする機会の方がずっと増えるだろう。日本の英語教育では、この事実をもっと重要視する必要があると著者は述べる。「それは英語を世界の国際言語と考える視点から見えてくる」(p. 28)。

「英語は世界の国際言語である」とは、日本が経済的に発展し企業が海外へ進出し始め、「国際化」という言葉が流行りだした頃から盛んに言われてきた。ここで改めて述べるには少々時代遅れな感もある。だが本書で改めて「国際言語」と叫ぶことには重要な意義があると言える。まず、これまで国際化と騒いできた割には、中学・高校の英語の教科書を開いてみれば、文化や語用の紹介などは英米文化、英米の英語に関するものがほとんどであり、それ以外の国々の英語に関して触れているものは希少である。オーストラリアやカナダなどの英語母語話者、あるいはアメリカ国内の多

種多様な英語にさえも触れることはほとんどない。

英語が国際的な言語であるということの本当の意味は、英米人などのネイティブ・スピーカーの英語（標準英語）がそのまま世界中に広まったということではなく、「多くのノンネイティブ・スピーカーがそれぞれの歴史的・社会的・文化的必然性に合わせて、いろいろな形で英語を使うようになっている姿」(p. 12) のことなのである。そして、このように英語が世界中に広まれば、必然的に英語は『多様化』していく。この『多様化』という言葉が本書を語るうえで重要なキーワードになる。自国内で英語をコミュニケーションの道具として使う機会が希少な日本では、この英語の『多様化』という世界的傾向に明らかに遅れをとっている。世界に目を向けてみれば、英語が多様化していることは明らかである。特に歴史や政治経済等の事情から、アジアにおける英語の多様性は注目に値するものであり、アジアの諸英語の紹介も本書の重要な目的の一つである。

本書第 2 章で紹介される「アジアの英語」を目の当たりにしたとき、英語教育に携わる者は発想の転換の必要性を感じずにはいられないであろう。アジア諸英語の特徴を知り、英米人のように英語が話せないことは決して悪いことではなく、むしろ当然のことだと考えることができれば、今ほど英語力の低さに対して悲観的ではなくなるのではないだろうか。もちろん、「だから今のままの英語教育でよい」と言っているわけではない。教師や学習者はもちろん、制度を作る側の文部省あるいは国も、この『英語の多様性』を認めることが必要である。

日本の英語教育に照らし合わせれば、アジアの英語は「間違いだらけ」である。本書で紹介されている例によれば、インドでは “Wednesday” を「ウェドゥネスデー」と発音し、韓国では “coffee” は「コピー」となる。文法では、不可算名詞を可算名詞化し、“Let me give you an advice.” と言ったり（マレーシア英語）、動詞を変化させず、“She study hard.” と言ったりする（シンガポール英語）。しかしもちろんこれを「間違い」とするのは、それこそが大きな間違いである。これは多様化した英語の一つの種類にすぎず、その国の人々にとっての「言語」なのである。そのことを日本人を含めたノンネイティブ・スピーカー、そしてネイティブ・スピーカ

ーも、認識しなければならない。

また、上のような発音・文法の違いのみならず、語法においても、アジア英語には興味深い特徴がある。英語だからといって、アメリカ人やイギリス人のような話し方をする必要は全く無い。謙譲と尊敬の美徳が守られているフィリピンでは、道端で道を尋ねる際にも、“Excuse me, may I ask you a question?” から始めるのがよいとされる。礼儀を重んじるインド人は、名前を尋ねる時にも “May I know your good name, please?” と、謙虚な態度を示す。これを日本人に例えれば、お辞儀をしながら “Thank you very much.” と言ったり、はっきりと “No.” と言わず、婉曲的な表現で、相手を傷つけないように申し出を拒否しても、決しておかしなことではないはずだ。もちろん、個人と個人とのコミュニケーションの上では注意すべきことはあるが、これを英語の間違いだとすることは、英語の多様性への認識不足であろう。

第 3 章で、著者は日本の学習者がネイティブ並の英語能力の獲得を求められていることを危惧している。ネイティブのように話せないと、「きちんとした英語ではない」と思ってしまうようにしつけられているのだ。このような志向を植え付けられると、自分のノンネイティブとしての正当な能力を評価できず、他国のノンネイティブに対しても、不当な評価を下してしまうのだ。

ではいかに改善していけばよいのか。本書ではその第一歩として、「新しい英語観の確立」を提言している。これは今まで繰り返してきたように、英語を英米の言葉と捉えるのではなく、国際言語と捉えるということだ。そうすることで、自分の英語を非母語話者の英語の一部であると考えることができるだろう。そして、自分の意志や思考を自分の英語で表現することができるようになるはずだ。「英語が下手でも間違っていても、発言を妥協しない態度が重要である。そう考えると、私たちの英語は必然的にニホン英語にならざるを得ない。しかし、そういう努力を積み重ねる中で、自分の英語能力を通用度の高いものに仕上げていけるのである」(p. 136)。

では、英語教育の現場においてニホン英語を教えるのかと言うと、そうではない。本書によれば、ニホン英語は、日本人が国際的に標準となる英

語を見本に勉強し、その結果として獲得した「英語パターン」なのだ。他のアジア諸国でも、学校では標準英語を教えている。規範的パターンは一般的で応用がきくからである。それでも、自国の英語パターンを使い、それを受容している。その根拠は、そのパターンでも十分通じ、そして学習者にとって獲得しやすいからである。

つまり、学校教育の中で標準的な英語（英米の英語）を学習することは重要であるが、それを完璧にマスターしなければならないということは全く無いのだ。英語のネイティブと、あるいはアジアのノンネイティブと英語を使って意志疎通を図る段階になったとき、ニホン英語であっても十分に自らの考えを述べることができ、また相手の英語パターンも認識して理解することができれば、英語学習の一つの目的は達成されたと言ってよいだろう。

では、我々は標準的な英語であるアメリカ英語を見本として英語を学習するが、アメリカ人の見方を無条件で受け入れてよいのであろうか。もちろんそのようなことはない。第 4 章において、本書はアメリカ英語の特徴を紹介しながら、我々はアメリカ英語をサンプルとして学ぶ中で、自分たちの感性と思想を見定めることが大切であると、主張する。確かに、日本人がアメリカ英語を学習する際、共感することよりも違和感を覚えることの方が多いのではなかろうか。例えば筆者は、英語学習の中で「英語では、誘いを断るとき、先にノーを言ってからその後で理由を述べる。」と教えられた。しかし、日本語を話す際には「～なので、行かれません。」などのように、理由を述べてからノーと言う。時には「～なので。」だけでノーをしめすこともある。このような言語習慣が身に付いているため、英語を話していても先にノーを言うことにはなかなか慣れない。だがこれも非母語話者の英語パターンの一つと捉えることができるのだ。英語を話しているからといって、普段のコミュニケーション様式を変える必要性はない。もちろん、「アメリカ人のように」あるいは「イギリス人のように」話したいという動機づけを持った学習者もいるだろう。そのような動機を否定することはない。ただ、英米人のように話さない自分以外の非母語話者を中傷するようになっては、その英語学習は成功したとは言えないのではな

いだろうか。

そうならないために、「英米の英語でなければ」という歴史的呪縛を取り除くことだ。例えば中学・高校の英語の教科書でアジア各国の英語を紹介したり、実際にアジアの英語に直に触れさせることも必要だろう。こうして、教師や学習者自身が新しい言語観を確立させなければならない。また、英語を日本の中でどう位置づけ、どのように教育していくのかという、国としての「言語政策」も必要となってくるであろう。アジア各国に比べ、日本の政府は外国語教育に無関心すぎるのではないであろうか。個人のみならず、国民的意識として『英語の多様化』を認識するようにならなければ、日本人の英語力の向上への道はまだまだ長いであろう。この認識ができれば、国際舞台でニホン英語で立派に立ち回れ、またその英語が間違いでも何でもないことに気づくであろう。